

## 漢俳の最初

博物館長 磯 波 護(教授・東洋史学)

漢俳とは日本の俳句の形式にならって中国で始められた新しい文学様式で、漢字で5・7・5文字からなり、季語をふくみ、各句末に韻をふむ。ある文学様式がいつ誰によって始められたかというのは確かめがたいものであるが、漢俳のはあいは1980年4月21日に、趙樸初によって北京で始められたのである。

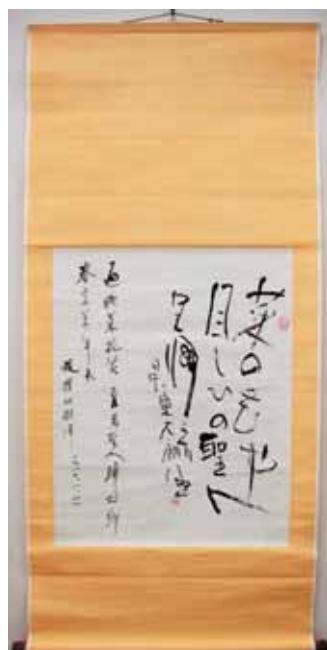
日中佛教交流に尽力した趙樸初は、2000年5月に92歳で逝去した。『趙樸初紀念文集』(開明出版社、2001年)には、国家宗教局長の葉小文の追悼文が掲載せられ、葉が1999年春に日本を訪問した際のエピソードを紹介している。葉が文部省を訪ね、俳人としても有名な有馬朗人大臣と会見した時、車中でものしたばかりの漢俳「桜綻江戸川、法脈伝承両千年、仏縁一綫牽」を披露し、漢俳の創造者が趙であると説明した。そして1980年に鑑真和尚像が中国に里帰りした機会の宴会の席上で趙が書いた漢俳を暗誦したそうだ。

『趙樸初韻文集』(上海古籍出版社、2003年)卷5に、唐招提寺の森本孝順長老に贈った「漢俳五首」が収められ、その原注に、東大寺の清水公照長老が近ごろ宴会の席で、揚州で作った俳句を朗唱され、通訳がその意味を口訳したので、俳句の格律に依って漢文に改め「遍地菜花黃、盲目聖人帰故郷。春意万年長」とした。漢文で俳句を書いたのは私が最初なので「漢俳」と名付けた、と見える。

清水を団長とする訪中団に参加した、大安寺の河野清晃の日誌(『日中佛教』第15号、1980年)には、4月21日に北京烤鴨店での歓迎宴で、清水が揚州で作った一句を披露すると、趙はすぐ矢立を取って返された、とその場の情景を活写していた。

2007年2月、東京銀座の松坂屋での古画幅即売会目録に、清水公照の俳句「菜の花や 目しひの聖人 里帰えり」に、趙が漢俳を添えた軸物のカラー写真を目以し、狂喜した。京都桂の美術商村山宅で、清水の没後に遺族から譲られた作品であることを確認し、購入した。まさに〈漢俳の最初〉を記念する合筆であり、私にとって無価の宝物である。

なお近年の『日中文化交流』には、漢俳に関する記事がしばしば現れる。2005年3月下旬に漢俳の誕生以来25年を期して北京で開かれた全国的な漢俳学会成立大会に、現代俳句協会代表団が参加し、2007年4月に中国首相として7年ぶりに来日した温家宝は、経済五団体主催の昼食会で自作の漢俳を披露した。



• 清水公照の俳句  
• 趙樸初の漢俳